平成27年8月13日

「あの日の記憶を忘れない」

産業情報学部企業システム学科　3年次
板良敷　彩

11年前の8月13日（金）あの日も今日のように日差しが熱く、沖縄は真夏の盛りを迎えていました。大学は夏休み期間に入り、沖縄にはいつもと同じ時間が流れていました。

午後2時15分いつもと同じ時間が一瞬で止まりました。轟音が響き、空には黒煙が上がる、映画の中でしかみたことのない光景が沖縄国際大学に現れました。普天間飛行場に所属するアメリカ海兵隊のヘリ墜落という衝撃的な事故です。沖縄県民の誰もが目を疑ったのではないでしょうか。テレビ画面には警察・消防、マスコミ、地域住民、そして米軍の人たちが写り、まるで何が起こったのか状況がつかめず、現場の騒々しい映像がニュースで流れていたのを覚えています。

そこで何が起こったのか。私たちの住んでいる島に何が起こっているのか。ただそれだけが知りたくて、不安と恐怖の入り交じった気持ちで、現場には多くの県民が集まりました。しかし、米軍が黄色いテープで墜落現場周辺を囲み、中には入れない。ここは私たちのキャンパス、私たちの島なのに。そんな疑問と信じられない現実とのギャップを多くの県民が感じたのではないでしょうか。

悲しいことに、このような事故は一度きりではありません。過去にも多く起こっているのが沖縄の現実です。しかしながら、過去にあった事故の記憶が薄れてしまっているのもまた沖縄の現実です。記憶があるからこそ今に繋げることが出来ると考えます。だからこそ、多くの人の記憶からあの日の記憶が消えないでほしいと思います。

普天間基地の周りには多くの住民が生活しており、「世界でもっとも危険な基地」と呼ばれています。小学校の上空を米軍のヘリが飛んでいます。これが当たり前の風景であっていいのでしょうか。いつものように学校へ行き、友達と会話を交わす。そんな日常の中に、墜落という事故がいつ起こるのかわからないという不安を抱えながら、生活しているのが沖縄の実情です。

6月23日の戦没者追悼式典に出席された安倍首相は「アメリカ軍普天間基地の固定化は断固としてあってはならない」と述べ、辺野古への移設を推進する考えを表明されました。また、「沖縄の基地負担の軽減は進んでいる。」と述べられました。普天間基地が辺野古へ移設すれば、小学校の上をヘリが飛ぶこともなくなり、周辺住民が抱える不安はなくなるでしょう。しかし、そうなれば、新たな問題も生まれてしまいます。県民の命は大切です。同時に、沖縄に生きている生物も大切だと考えます。県民だけではなく、沖縄の自然や生物を含めて沖縄なのではないでしょうか。基地は辺野古へ移ることになっても、沖縄に基

地があることにかわりはありません。

「日本人は、安全と水は無料で手に入ると思い込んでいる」。この有名な言葉は、1970年に出版された『日本人とユダヤ人』に出てくるものです。あれから45年、コンビニにはペットボトル入りの水が数多く並べられ、日本人でもお金を払って水を購入する人が増えてきました。一方で、安全は無料で手に入ると思い込んでいる日本人は依然として多いのではないでしょうか。

改めて言うまでもありませんが、安全は無料で手に入るものではありません。安全を手に入れるためには何かを、誰かを犠牲にしないといけません。ただ、沖縄は常にその犠牲を強いられている、と考えると悲しく仕方がないことでは済まないと考えます。

恒久平和をどのように構築するのか、難しい問題であり、答えは決まっていないかもしれません。平和について、安全保障について、すべての国民が自らの問題であると考えてもらうためにも、あの日、沖縄国際大学で起きた事故の記憶を風化させてはいけない、そう思います。

平成27年8月13日

「本当の意味での平和とは何か」

産業情報学部産業情報学科　3年次
高宮城允

沖縄国際大学に米軍ヘリが墜落した日、私たちが見たのは黒々と煙と炎が高く上がるニュース映像でした。アメリカ軍による不条理な振る舞いや怒りに震える沖縄の人々の様子は連日新聞やテレビ、あらゆるメディアで報道され続けました。今でもその記憶は残り続け、本構内でも抗議活動が毎日のように行われています。

平和とは何でしょうか？小学生くらいの子ども達ならきっと素直にこう答えるでしょう。「戦争のない世界」、私たち沖縄県民が幼い頃から繰り返し教わってきたことです。激戦地となった沖縄だからこそ、それを経験したからこその教えです。今、私たちはその教えの通りに先人たちの紡いだ命を平和へと導けているのでしょうか？小学生の頃、誰もが一度は平和学習を受けたことでしょう。戦争経験者による痛々しい話は思い出すのもためらわれます。その中のあるお婆さんによるスピーチが今でも深く記憶に残っています。頭上から降ってくる銃弾の雨と響き渡る悲鳴の中を走り抜け、周りでは知り合いや家族が次々と倒れていく、まさに地獄だった、と。壕の中は周りが見えないほどの暗さで、そのうえ、血や排泄物、消毒液、傷口が腐る臭いなどの異臭が充満していたと言います。その臭いが戦争の記憶なんだ、と目に涙を浮かべながら語ってくれました。これが戦争です。悲しみ、怒り、恐怖、憎しみ、恨み、そういう負の感情が積み重なった結果として人間が作り上げた地獄です。戦争を繰り返さないこと、それが先人たちが真に願う平和です。

普天間基地の周りでは今日も抗議活動が行われています。早朝から夕方まで住民が集い、抗議声明を掲げ、時にはリボンをフェンスにくくりつけることで、時には歌で、基地反対を呼びかけています。住民の怒りは増していき、米軍や警察と争いになることもありました。私は、この活動を目にするたび、怒りや憎しみ、悲しみなど、まるで戦争を作り出す負の感情のそれと同じようなものが伝わってきて胸が痛みます。

話は変わりますが、少し私の経験をお話しします。冬のある日、私は鍵を忘れ家に入れずにいました。寒い中、仕方なく玄関先で親の帰りを待っていると、隣に住むお婆さんが暖かい天ぷらをいくつも紙に包んで持ってきてくれました。中に入って待っても良いよと、とても優しくしてくれてすごく暖かい気持ちになったのを覚えています。私は、このゆいまーる精神という優しさがあるから、沖縄のことが大好きです。最近では多くの人が忘れてしまっていますが、人は人を幸せにする力を持っています。この先の沖縄を作っていく上で、怒りや憎しみなどの負の感情ではなく、優しさや情で声を上げていくことが本当の平和を作っていくのだと私は信じています。安全保障関連法案が可決されてしまい、日本がまた戦争へと一歩踏み出してしまった今だからこそ、ここ沖縄から平和とは何かを考え直していく必要があるのです。

ご存知の方もいるでしょうが、昨日の午後４時ごろ、キャンプシュワブ沖に米軍ヘリが墜落したと報道がありました。皆さんは何を感じたでしょうか？また米軍によって住民がおびやかされたという「怒り」ですか？それとも、行方不明の２つの命を想う「情け」ですか？最後にもう一度問います。平和とは何でしょうか？本当の意味での平和な世界とは、また、それを作っていくとは、どういうことでしょうか？